

天劍漫録

一、 細心焦慮は計画の要能にして、虚心平気は実施の原力也。

「細心：細かいところまで心を配ること。 焦慮：焦って苛立つこと。 虚心：心に何のこだわりも持たずに、素直であること。」

二、 敗けぬ気と油断せざる心ある人は、無識なりとも用兵家たるを得。

三、 大抵の人は妻子を持つと共に片足を棺桶に衝込みて半死し、進取の氣象衰え退歩を始む。

四、 金の経済を知る人は多し。 時の経済を知る人は稀なり。

五、 手は上手なりとも力足らぬときは敗る。 戦術巧妙なりとも兵力少なければ勝つ能はず。

六、 一身一家一郷を愛するものは悟道足らず。 世界宇宙等を愛するものは悟道過ぎたり。

軍人は満腔の愛情を君国に捧げ、上下過不及なきを要す。

「悟道：仏道の真理を悟ること。 満腔：体中、満身。」

七、 本年の海軍年鑑を見るに、吾国海軍も幕の中に入れり。 精励息まされば大関にも横綱にもなるならん。

勉強せざれば又三段目に下がらざるべからず。

八、 「ネルソン」は戦術よりも愛国心に富みたるを知るべし。

九、 人生の万事、虚々実々臨機応変たるを要す。 虚実機変に適當して、始めて其の事成る。

十、 吾人の一生は帝国の一生に比すれば万分の一にも足らずと雖、吾人一生の安を偷めば帝国の一生危し。

「雖（いえども）：たとえ〜でも。 偷（ぬす）：「盗」と同意語。」

十一、成敗は天にありと雖、人事を尽さずして天、天と云うこと勿れ。

十二、敗くるも目的を達することあり。勝つも目的を達せざることあり。真正の勝利は目的の達不達に存す。

十三、平常に智を磨きて天蔵を発き置くにあらざれば、事に臨みて成敗を天に委せざるべからず。

十四、苦きときの神頼みは、元来無理なる注文なり。

十五、教官の善悪、書籍の良否等を口にする者は到底啓発の見込無し。

十六、自啓自発せざる者は、教えたりとも実施すること能はず。

十七、岡目は八目の強味あり。責任を持つと大抵の人は八目の弱味を生ず。宜く責任の有無に拘わらず、岡目なるを要す。

唯是れ虚心平気なるのみ。

十八、虚心平気ならんと欲せば、静界動界に修練工夫して人欲の心雲を払い、無我の妙域に達せざるべからず。

兵術の研究は心気鍛錬に伴うを要す。

十九、天上天下唯我君国独尊は軍人の心剣なり。

二十、進級速かなれば速やかなる程吾人は早速にて勉強せざるべからず。

何となれば一定の距離を行くに少き時間を与えられたればなり。

二十一、吾人の今後三十年、其の内十五年は寝て暮らすと思えば、何事を為す違もなし。

二十二、治に居て乱を忘るべからず。天下將に乱れんとすと覚悟せよ。

二十三、世界の地図を眺めて日本の小なるを知れ。

二十四、世界を統一するものは大日本帝国なり。

二十五、家康は三河武士の赤誠と忠勤とに依りて天下を得たり。小大此理を服膺すべし。

「赤誠：嘘や偽りのない心。服膺（ふくよう）：心に留めて忘れないこと。」

二十六、元龜天正の小天地は、目下世界の全面なり。

「元龜天正：戦国時代の元号。一五七一年（姉川の戦い）～一五九二年（朝鮮出兵）。」

二十七、人智の発達と機械の進歩は、江戸長崎の行軍時間を東京倫敦の行軍時間と同一にしたることを忘るべからず。

二十八、三月になると早や寒さを忘れて陽気に浮かるる様の事にては、次の冬の防寒は覚束なし。

二十九、咽元過ぐれば熱さを忘るるは凡俗の劣情なり。

三十、観じ来れば吾人は緊禪一番せざるべからず。